幼稚園の教育

Nursery-Kindergarten Education

洋書紹介 Ed. Jerome E. Leavitt

Mcgraw-Hill Book Co. Inc. N. Y. 1958

第七章の「お話と音楽の時間」はオレゴン州、ポートランド公立学校の幼稚園の先生が書いている。

二才から六才の子どもは、自分の住んでいる世界を熱心な、エネルギッシュな探求心をもって知ろうとしている。そうして知識を得ることを喜び、その知識を使うことで満足を得る。親も教師も、またこのことを理解し、認め、その要求に従って指導することを考えなければならない。このような前おきで、子どもの自発性、自然性を強調しているが、このことは次のお話の時間と音楽の時間について、それぞれ項目をあげ述べられている中でもしばしば主張されていることなのである。

最初の「物語への要求」のところでは、子どもにとって物語はどうして必要かということが述べられている。物語は子どもの世界を拡げ、経験を豊かなものにし、子どもと環境との間のみぞに橋をかける役割をし、将来の読書の楽しみの基ともなるというのである。例えば、二才の子どもは物語の中に「物」の王国を見つけ、三、四才では自分が物語の中の子どもになって経験を新らしくし、五、六才児はより広い新らしい外の世界へと目を向けることができる。このことは自然、物語を選択する場合の基準ともなる。「最も適当な物語の選択」の項では、この聴き手の発達水準をさらにこまかく述べているが、実際に物語をする時には、その話すグループによって、いろいろと経験が違うので、社会的な環境とか子どもの過去の経験とか、興味など、またすでに話した物語をも考え合わせて選択することとなる。

子どもの発達水準にかみ合い、子どもに興味を持たれ、文学的にも価値のあるような本をあげてあるリストもいくつかある。また雑誌や新聞でも批評される。これらのリストや批評も本を選択する時には大いに参考にされている。

部屋の一角にある本を見るところ、ブック・コーナーに揃えておく本の例には、子どもの実際の経験を書いた本、動物と物についての本、空想的な物語、特別な意味のない本、知識を強調した本、詩、マザー・グースと大きく分けて、それぞれやさしいものから順に本の名をあげている。このブック・コーナーは子どもたちにとって、自分で物語を楽しむ場所なのである。多くの字を読む以前の子どもたちは、絵を見て先生のした物語を想い出したり、概念を確めたり、絵で理解しながら本を見たり、そばの子に覚えている物語の筋を聞かせているなど、このブック・コーナーはお話の時間と結びつき、再びその物語を楽しむことができるところなのである。だから子どもが手に取りやすいように、棚に十冊から二十冊の本を並べ、お話の時間とも関連づけて本を交代させて並べておく。お話の時間

を基にして、あくまで子どもの自発的な、発展的な活動を期待する指導の一角として、このブック・コーナーも数えられるのである。

「物語の新らしい傾向」としては、第一に、一九二一年 Lucy Sprague Mitchell が、子どもが精神的な成長の中でした実際の経験の物語を出したこと。第二に、第一次大戦後の機械技術の進歩で、さし絵を容易に入れられるようになったため、子どもの興味を導く方法として、さし絵が完全に物語の一部になり、単純、明瞭、直接的であることを目標にしてきたこと。第三に、美しい、良い内容の、価値のある本が量産でき、叢書などとして手ごろな値段で売られるようになったという三つの傾向があげられている。就学前の子どもの多くは字を読むための準備期にある。絵本は知的・情緒的発達と不可分の関係にある。このことは、先のブック・コーナーの絵本の占める役割をも考え合わせると、物語の本のあり方、絵本を用いた指導の方法、とくに教師が中心のお話の時間と、子どもの自由遊びの中でのその時間の発展としての活動など、いくつかの問題を出しているように思われる。

物語をする時には、部屋の中の場所、話し方の注意など、物語を心から受け入れられるような雰囲気を作る。本を開く前にその物語と子どもを結ぶため、グループの会話をしたりもする。また子どもが話す物語としては、子どもの経験や共通の話題をグループや個人で話し合い、教師は子どもを助けて筋を立てるように指導することが考えられている。これもお話の時間の一つの活動である。

「物語をもう一度楽しむ」ために物語を演じることをする。それは物語を想い出して絵本を見ることと共に、お話の時間の発展的な活動として考える。お話の時間は物語を教師がすることだけではないのである。子どもの活発な活動を導くものでなければならない。子どもは良い物語を聞いた後、これを繰り返すことを好む。それはことばでというより、創造的な活動で表現される。これは聞くことの発展として考えられる。小さい女の子が物語の中の母親になって人形箱を保育室にしたり、男の子が小さい飛行機の物語を聞いて、石で離れ業をさせてみるなど、筋に従った遊びが出てくる。また子どもの良く知っている物語や詩を始めると、丘を登ったり、鉄砲を射ったり、旗を振ったりなどとその筋に合った動作をしながら、調子良く韻律を一しょになって歌う。三匹の小豚の物語はみんなで豚になったり狼になったりして遊び、プウプウと息を吹く韻律などを入れたりして、実感を出し、劇にもする。六才児になると役を割当ててすることもできるようになるので、みんなで参加できるような、役の多くある物語が適している。このように本を読む以前の子どもは劇化を通しても物語の経験を完全にする。この頃の子どもは、活動することによって経験を作っていくことを多くする。お話の時間といっても、ただ子どもに聞かせるだけでなく、子どもの活動の基として、子どもの活動を考えながらすることに大きい意味があるのである。

次に音楽の時間についてであるが、最初に「音楽への要求」のところで言われていることは、音楽は我々のまわりの至るところにある。その中で子どもの生得的な音楽の力を伸ばすことが、子どもの自然の要求にかなったものだというのである。二才から六才の子どもの音楽は、環境の中の音やリズムを感じ、これを遊戯や歌などの身体的な表現にすることである。この表現を助け、子どもの感じた

ものを伸ばし、高めることが音楽の時間の教師の指導であるというのである。

このように子どもの音楽を考えると、毎日の計画の中で、音楽を指導する場合にも自然にその方向が定まってくる。子どもが音楽を成すということは身体的、情緒的、社会的、知的成長とも関係がある。このような成長と相まって、子どもの音楽活動を自由に伸ばすためには抑えつけられたりしない環境が大切である。音楽の活動はこういう中で話したり、歩いたりするのと同じように、遊びとして自然に、自発的に出てくるものなのである。

まず、リトミックは音楽の骨組である。人間の心臓が規則正しく打つように、人間は律動的なものであり、この内にあるリズムは使ったり、成長したりして発達するというのである。早く走ったり、ゆっくり歩いたりすることを繰り返していくとリズムとなる。子どもがバッタのように跳ねる時には太鼓などでリズムを付け、リズム感を指導する。このように自然の動作を認めながらリズム感を養い、拡げるということが指導の初めに考えられるのである。そして次第に木の葉になったり、いも虫になったりと活動を拡げ、感じたものを表現し、説明していく。先生はこのような子どもの動きに対してピアノや太鼓でリズムを合わせ、レコードやピアノでメロディーを作る。これが遊戯なのである。ここで考えられることは、まずリズムということが音楽の時間に考えられる最初のものであり、この指導は教えるのではなく、子どもの持っているリトミックを序々に伸ばすことなのである。型のある遊戯を最初から教えるということは考えられないことなのである。おとなの作ったものを覚えるのではなくて、あくまで各自の自由な表現を大切にしている。しかし、フォークダンスなど他の子どもと経験を同じくするような、社会的経験をする音楽遊びも子どもが喜んでするものとして加えられている。

歌も同じように自分の周囲で感じた音を声で表したり、子どもが遊びながら節をつけてつぶやくものが歌になったりする。また子どもがお人形をゆすっている時、子守歌を先生が歌ってあげるとか、極く自然に子どもの生活の中にあるものなのである。グループで歌う場合さえも、お誕生日の話し合いをしているうちに「お誕生日おめでとう」の歌を揃って歌い出すというように歌われるのが好ましいのである。

このように、音楽の時間でなされることは、リズムと自由表現の指導が中心になっている。歌を揃って歌うことは、子どもが喜ぶことであり、子どもと子どもとのきずなを深めることになるが、歌の時間でさえも、お誕生日の歌の例のように、自然に揃って歌い出されることが望まれる。子どもは家庭や、友だちの中で、ラジオやレコードで自然に歌を覚え良い音楽を聞く。だから良い音楽に親しむことができるような考慮もまた音楽の指導の一つとして大切なことである。蓄音機について書かれているところでは、子ども向きの名曲がずらりとあげられている。子どもはレコードのかけ方を覚えて、良い音楽を自由に聞くのである。

要するに、先生が中心になって教え、活動する時間だと考えられがちなお話の時間、音楽の時間でも、決して先生が中心なのではなく、子どもの自然の、自発的な経験や活動を指導する、伸ばすということが主として考えられているということなのである。

（北野誠子）